

学生大使 実施報告書

氏名：平原結衣

学部・学科(コース)・学年：人文社会科学部グローバル・スタディーズコース3年

派遣先大学：新モンゴル学園

派遣期間：2025/2/26～2025/3/11

1 日本語教室での活動内容

今回の日本語教室の活動は、モンゴルのツアガンサルという旧正月の時期と重なったため、二回ほどだったが、有意義な時間だった。新モンゴル学園の高専や工科大学の学生が考えた、日本の興味のあるトピックについて、山大で派遣されたメンバーがそれぞれ分担して、授業を行った。私は、日本の観光地や旅行についての授業を行ったが、現地の学生が積極的に質問をしてくれたため、楽しく授業ができた。大学生の他に、高校生に向けても、日本について話し合う時間があり、彼らの日本語のレベルに驚かされた。彼らは、積極的に質問をしてきて、予想以上に会話が深められた。そこでは、将来日本の大学に進学したい学生や、日本で働きたいという願望を持っている学生がいて、とても勉強熱心で、まじめな印象を受けた。また、高校生たちがステージでモンゴルの伝統的な楽器や踊りを披露してくれて、感動した。

新モンゴル学園で授業を実際に行い、やさしい日本語の活用や話すスピードを調整することの重要性を改めて実感した。

2 日本語教室以外での交流活動

私は、新モンゴル学園の工科大学生である二人の女性のお宅にそれぞれホームステイをさせていただいた。彼女たちは、日本語がとても流暢だったため、日常の会話で不便に感じることはほとんどなく、安心して過ごせた。今回、モンゴルの旧正月の時期に派遣されたため、ホームステイの方の家族や親せきのお宅に挨拶に伺うことが多かった。その際、モンゴルの旧正月に食べるボーズなどの伝統料理を食べたが、訪問するお宅によって、その味や形が異なっていて、非常に面白く感じた。また、ホストファミリーに、願いのかなう石がある場所に行こうと誘われ、車で一時間半くらいの田舎に行った。冬だったのでとても寒かったが、日本ではなかなかできない体験ができた感じ、思い出に残っている。ツアガンサルが終わった後は、日本語教室が始まった。授業後は、教室で仲良くなった現地の学生とビリヤードやトランポリンをして交流を深めた。休日は、山大生と新モンゴル学園の学生とで博物館に行ったり、チンギス・ハーン像を見に行ったりして、充実した日々を過ごすことができた。また、モンゴルの温泉にも連れて行ってもらい、ゲルのようなサウナに入ってリラックスすることもできた。

短い間ではあったが、ホストファミリーと一緒に、文化の違いを超えて生活した一日一日は、私にとって一生忘れられない経験になったと感じる。

3 参加目標への達成度と努力した内容

私の目標は、日本語教室での授業やホームステイを通じて、異なる文化を受け入れ、異文化理解

【学生大使 実施報告書】

力を養うことであった。まず、日本語教室では、授業や現地学生との話し合いの中で、言葉の壁はあったものの、伝え方を状況に応じて変えながら、あらゆる文化の違いを発見することができた。ホームステイ中は、毎日が異文化を感じることの連続だった。ホストファミリーと、モンゴルと日本の文化の違いや歴史について話した時間は、とても濃厚で、二週間という短い間ではあったが、学ぶことがとても多かった。そのため、参加目標の達成度は高く、改めて異文化について考え直す契機になった。また、こういった発見の中で、私たちが普段当たり前だと感じていることを疑ってみることが重要だと感じた。

4 プログラムに参加した感想

モンゴルに行く前は、ホストファミリーや日本語教室に関して、沢山の不安があった。しかし、新モンゴル学園の中村綾子先生や工科大学の学生が、優しく接して下さり、安心して二週間を過ごせたと感じる。特に、モンゴルのツアガーンサル(旧正月)を実際に過ごせたことは、とても思い出に残っている。モンゴルでの正月の過ごし方や日本との正月の過ごし方の違いを直接肌で感じる事ができ、貴重な体験ができたと感じている。今回は、親戚のお宅だけでなく、ホストファミリーのクラスメイトのお宅にも訪問する機会があり、たくさんの方と触れ合う時間が非常に新鮮だった。派遣中、財布を無くしてしまうハプニングがあり、とても焦ったが、幸運なことに見つけることができた。やはり、海外で財布やスマホなどの貴重品をしっかりと管理することは不可欠である。

モンゴルでは、楽しいことだけでなく、苦しい場面も多々あったが、その経験は自分を成長させてくれたと感じる。

5 今回の経験を踏まえた今後の展望

日本語教室での授業を振り返ってみると、スライドの内容や構成、話すスピードを、もっと時間をかけて工夫するべきだったと反省している。また、学生の日本語レベルに合わせて、その都度英語を話していれば、理解が促進されたのではないかと感じた。今回得た反省を、これから留学生や外国人と接する際につなげてきたい。

また私は、引っ込み思案な性格のため、大人数の前になると、緊張してしまい、言いたいことをはっきり伝えることが苦手である。今回のプログラムでも、複数人で話し合う場面が多く、緊張してしまうことがかなりあった。しかし、周囲の方が温かくサポートして下さり、そういった場面で、勇気をもって伝え、行動を起こすことの重要性を学んだ。同時に、様々な方と関わる中で、そういった性格は、周りに迷惑をかけ、グループの連携を乱すことになりかねないということも身にしみて感じた。そのため、今後は緊張する思う前に、一歩踏み出すことを意識したい。今回のプログラムで関わった方々は、自分を見つめ直すきっかけを与えてくださり、大変感謝している。また、ホストファミリーをはじめ、新モンゴル学園の中村先生や工科大学の学生には、二週間という短い間ではあったが、大変お世話になり、この場を借りて心から感謝を伝えたい。

6 現地での活動写真

写真1

ツァガンサルで(旧正月)で食べた料理



写真2

工科大学のクラスメイトたちと撮った写真



写真 3

ホストファミリーに連れて行ってもらったガンダン・テクチェンリン寺



写真 4

新モンゴル学園の学生と交流した様子

